甲状腺外科草子 136
哲人宰相：大平正芳余話⑧

杉野　圭三

日米繊維摩擦と宏池会

1968 年、**通産大臣**となった大平は**日米繊維交渉**にあたった。

大平はスタンズ米商務長官と交渉を行い、「米政府が諸国に対し繊維品輸出自主規制を要請することにより解決を図ろうとしているのは、米国の Prestige のためにも、自由貿易推進のためにも悲しむべきことだ。米国の繊維産業の実態が好況であり、この種の保護的措置を要求することを正当化する事実はどこから見ても発見できない。どういう程度の injury をもたらしているかという点について究明するのには吝かでありませんが、これを輸出国の自主規制という形で解決を図ろうとするやり方は Principle として十分理解できない」と主張した。

また講演の中で「アメリカが繊維の自主規制をやれというような要求を日本にするのは少し筋違いではないか。それは明らかに自由化への歩みと逆行したものであって、アメリカの名誉と権威のために惜しまれますし、またわれわれとしても国内を説得する自信がないのであります」とも述べている。

1969 年、佐藤はニクソンと会談。いわゆる「沖縄返還と日米繊維交渉密約疑惑」である。マスコミからは**「糸で縄を買った」**と揶揄（うまいことを言う！）された。大平は交渉妥結のための妥協をせず、佐藤から疎まれ宏池会の宮澤喜一と交代させられた。

大平は佐藤の人事と外交手法に批判的で、沖縄返還に関する「核抜き本土並み」という方針に「猫が鯨に噛み付くようなものだ」と冷評していた。

宏池会は池田の後、前尾繁三郎が会長だったが、大平は若手議員を集めて「**木曜会**」を作った。1970 年の総裁選で、佐藤は「前尾が出馬しなければ内閣改造をして宏池会を優遇する」と約束したが、この約束は破られ前尾の影響力は低下した。

大平は前尾を次のように評している。

「ぼうようたる大人物、欲のない人格的には立派な人だ。しかし健康からいっても、また性格、性向からいっても国民のかっさいを浴びたり、党内の多数派工作に向く人ではない。だから天下人になれないかもしれない。しかしそれは彼の人格を落とすものではない」

前尾繁三郎

前尾、福永健司、大平（1971 年 4 月 17 日）

1971 年（昭和 46 年）、田中六助ら木曜会の「**大平クーデター**」で前尾にかわって大平が宏池会会長に就任した。大平は「権力を手に入れるためには、必要とあらば義理や人情を振り捨てることもやむをえない」、政治家の宿命であると考えた。宏池会を去るものもいたが、大平は「派閥的活動というものは、いい方向に働けば許容できるものじゃないか。これが例えば人事その他のエゴイズムに走ることがあれば、矯（た）めていかなければならない。派閥的活動は人間の集団にはある程度、避け難いものである。三人寄れば派閥はできる、政界はジェラシーの海」と語った。

大平は**派閥の功**を３つ挙げている。

① 政治家ないし政治集団の活動の根源である政治的エネルギー・活力を生む場所
② 政治的権力の独裁をチェックする機能
③ サロンないしは勉強会的に気心の知れた者同士が自由にモノを言い、親睦を深めるオアシス。

大平は**権力**に関して述べている。

「権力と言うものがそれ自体孤立してあるものではなく、権力が奉仕する何かの目的がなければならないはずだ。権力はそれが奉仕する目的に必要な限りその存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許される」

また次のようにも述べている。

「世界史の運命がけわしくなってくると、か弱い寄る辺なき人間がその奔流に流されることを黙視するわけには行くまい。そのためには、あらゆる術策を用意しなければならないのは已むを得ないことである。しかし権力の本体は、そういう術策にあるのではなく、権力者じたいの在り方にあるのだということだけは銘記すべきであろう」

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2025 年 5 月 9 日